

ちょっと近世・ほんと現代 番外編

「百。」

百と言えば、百万。もちろんこのマガジンの総発行数ではありません。

レコードが売れなくなっているのだそうです。あの宇多田ヒカルさんでも百万枚を切るのだとか。

このマガジンの講読者数は400名程で、こんな地味な内容なのに結構多いなあと思っています。

ですから百万以下でも相当なものだし、歌手の数も昔よりずっと増えているし、ばらつくのも当然で、しかしふと自分のことを振り返ってみると、何年もCDを買っていませんでした。

買うどころか、借りたこともない。

まだLPしかなかった時代、お年玉を貯めて大都市に行き、大量に輸入レコードを買いあさっていました。その頃からレコードの値段自体はほとんど上がってなくて、むしろ下がった位なのに、ちっとも買わなくなった。

そういえば、CDになってから、私の音楽に対する関心はがっくりと減速したような気がします。手軽に聴ける、編集も簡単。音質の劣化も少ない。

けれど、カセットデッキを待機させ、アンプのボリュームを絞っておき、レコードに針を落とす瞬間の、あの「ぼん」という音が収まったらボリュームを一気に上げる、という手間までかけて何本もお気に入りテープを作ったのは、もう昔のことです。

「ぶらぶら。」

とはいえ、音楽に全く興味がなくなったわけではなく、CDランキング番組はよく見ます。その中で、百万に達さずともトップに立っていることは間違いない宇多田ヒカルさんのビデオクリップ(DVDクリップというべきでしょうか)の中に、伊藤若冲(じゃくちゅう)を見つけました。

歌う彼女の後ろ、ちょうど隠れてしまうのですが、白い縦長に丸い牙のある象が、ゆっくりと首を左右に振っている。

あれは、「樹花鳥獸図屏風」の右にいる象です。筆者は誰なのか、諸説あるの

だそうです、画面に無数の灰色の升目を描き、その中を塗ったり残したりすることで動植物をこれまた無数に描いていく、こんな手間の掛かることをする画家が、若冲の他にそんなにいたとも思えません。

歌の題名は「SAKURAドロップス」。彼女を包み込む鳳凰も、もしかしたら若冲の「老松白鳳図」からとったのかも知れませんが、羽があまりに風になびきすぎて、生っぴい。

私はDVDプレーヤーを持っていないので全編を確認は出来ないのですが、他にも若冲のようなそうでないようなモチーフが、いくつかあります。

「人気。」

放映は終わったようですが、サントリーの「聞茶」のコマーシャルでも、井上陽水さんが若冲の鶏の上を転がっていました。

三百年を得ても色褪せない若冲の高い技術が、映像に携わる人々の心を掴むのも、当然と言えば当然のことです。

でも、ちょっと、なんだか、なのです。

そうやって伊藤若冲の名前が広まっていき、人気が出て、ブームのようになって、こんな画家が江戸時代にいたんだあ、凄いなあ、ということになれば。

江戸時代の画家に対してみんなが持っている固定観念も、ちょっとは変わるかも知れない。

けれど、ブームは、ブームです。

彼はもうこの世にはいません。確かに、新たに発見される画もあるでしょう。ブームが来れば、再発見される数も増えるかも知れない。

けれど、ブームは、ブームです。ムーブメントたりえません。

サッカーの試合を堀に飛び込んだり町中で花火を上げたりする理由に使っている若者達をみると、ワールドカップが終わった後の空しさを今から想像して、江戸絵画ブームなんて絶対来て欲しくないと願う、私はやっぱり江戸絵画のファンなのでしょうか。

いかがでしたか。9日はハングル検定試験でした。試験の階級が増えて、易しくなっていました。たぶん合格。たぶん。秋も受けるぞ。おー。

「百一。」

百一と言えば、101。犬ですね。あれは全部兄弟なのではなく、いろんな所から盗まれてきたのが集められたそうです。悪い女の人毛皮にするためにダルメシアンを集めるのです。

ところであのお話、原作はどこの国のものなのでしょうか。

実写版で見たときは、なんだか仕事を持って一人にいる女の人化け物、みたいな描かれ方してましたが。

もともと中世のヨーロッパでは、仕事を持って結婚しない女の人、たとえば薬を調合するのがうまい人なんてのはみんな魔女でした。西洋の昔話で、結婚して専業主婦してる魔女なんて一人も出てこない。大体、結婚したら話が終わるのがほとんどですからね。

でも、専業主婦の魔女がいたら、それはそれで楽しいかなあ。子供の送り迎えの時間を気にしてる魔女とか、ローンを返すためにパートに出てる魔女とか。可愛いなあ。

そんなものは魔法で解決してしまえばいいのに、と思っても、家事関連のことについては魔法は使えなくて、まるで自分のことは占ってはいけない占い師みたいで、ジレンマなのでした。って、私が勝手に想像しているだけです。

実際、魔法でどば一つ、と解決してしまえばいいことなんて、そんなに多くありませんからね。魔法の箒を使えたとしても、全ての主婦が使えるのなら、空中で交通渋滞が起きるわけですし、料理や皿洗いをやってくれる使い魔がいたとしても、結局あちこち気に入らないところが出てきて、二度手間になりそうだし。

それに、家事を全部魔法で済ませて遊びに行ったとしても、一人じゃつまないし。

「魔女。」

だから、現代の奥様は魔女でもいいわけで、実際、最近のお母さんの若さには目を見張るものがあります。本当にこの人が子供を・・・と考えて、考えたこちらの方が恥ずかしくなってしまうほど、若い。

高校生の子供さんがいらっしゃるのに、どう見ても三十代前半、瞳なんてきらきらしています。吸い込まれそう。もう孫が3人も、今度で4人目なのに、張りのある声に、しみ一つない、ぷりぷりのお肌。

昔よりも生活環境は悪くて、空気も水も悪くて、食べ物にもいろんな添加物が入っていて、それらが全て健康に悪いなら、人々は若さを保てず、あっという間に年老いていく、はずなのですが。

昭和四十年代のドキュメンタリーなどを見ても、明らかに今のお母さんの方が若い。髪型や服装で老けて見えるというのを差し引くとしても、今のお母さんは明らかに綺麗。

ほら、現代の奥様は、やっぱり魔女。

「東洋は。」

東洋の魔女、という言葉を出される方もおられるでしょう。けれども彼女達オリンピックバレーボール女子選手は、魔法を使ったわけではない。

それに、「魔女」という言葉の中に、女だてらに足を出して大声を出す背の高い彼女たちを揶揄する響きが、確かにあります。あんなことしてたらお嫁に行けないよ、そう囁く声が、後ろから聞こえます。

だから、ちゃんとお嫁に行けるように、魔女達は禁欲生活を強いられます。

それじゃあ魔女じゃなくて巫女じゃないか。そうですね。その辺だけがいきなり日本的になる。まあ、「東洋の巫女」じゃ弱そうだからでしょうが。

怒鳴り散らす監督に泣きながらついて行かなくても、女性は魔女になれる時代がやってきました。永遠の若さと社会保障を味方に付けた彼女達に、さて、男性達はどうついていけるのでしょうか。

いかがでしたか。韓国、残念でしたねえ。ドイツのキーパー、世界一だそうですから。最初はある程度盛り上がってはいなかったけれど、いい試合をたくさん見ることが出来たのはよかったですね。

「二。」

二と言えば、二枚目。二枚目の語源は、歌舞伎興行の看板で、二番目に置かれていたのがトップスターの男前で、三枚目が笑わせ役だったから、というのは有名な話。

二の線、という言い方もされます。今日はちょっと二の線で行く、つまり男前を気取ってみる、という意味になります。

逆に三の線なら、ふざけて笑わせてみる、ということになります。ただしどちらの場合も、普段は逆でなければ意味がない。いつもとは違う自分をちらっと見せてこそ、その線は生きるわけです。

一般的に、二枚目というのは男性のことですが、私は普段は二枚目で三の線が胸元に入っている、という女性が好きです。綺麗でしっかりしているのに、ちょっと間の抜けたかわいらしさがある。

男性では、残念ながらそういう人はあまり見かけません。気取りすぎているかふざけすぎているかになってしまうのですね。男性は女性のように多面性がないので、胸元や襟元にワンポイント三の線、というのは無理なのかも知れません。

「ばーっ。」

歌舞伎などの演劇から生まれた慣用句は、その他にも多くあります。十八番、檜舞台、引っ込みが付かない、大根、シテ戦、などなど。

その中で、あまり使われることはありませんが、好きな言葉があります。

「ケレン味」。漢字では外連味と書きますが、ちょっと読みにくいのでカタカナになることが多いようです。

これは怪談ものなど、仕掛けが多いものに対して使われます。提灯がばーっと破れて人の顔になるとか、戸板がばーっとひっくり返って血塗れの死体が出て来るとか、扇の先からばーっと水が出て来るとか、とにかく派手で人を驚かすものに対して、ケレン味がある、と言います。

ですから、何の取り柄もない少年がいきなり蜘蛛男になってばーっとビルを駆け上るとか、真面目な郵便局員だったのに黒い服を着たらばーっと妖怪退治人になるとか、子供部屋のクローゼットを開けたら毛むくじらのモンスターがばーっと出て来るとか、そういうものもケレン味があるといえます。

けれど、映画の場合は、コンピューターと編集という奥の手があります。舞台の

ように、その場限りで失敗したおしまいだ、という緊張感があるからこそ「ばーっ」も生きてくるわけで、ですからいくらでも修正の効く、というより、全編が修正の固まりのそれは、真のケレンとは言えないのかも知れません。

「荒さ。」

日本のケレンは緻密を極めて、ゴジラやウルトラマンになりました。

子供番組では、かぶり物のヒーローが大人気。ちょっと昔ですが、仮面ノリダーに出て来た怪人は美しかった。バルタン星人やキングギドラも傑作でした。

けれど手作りには時間と技術が必要です。コンピュータグラフィックにも時間や技術は必要なのではと思いますが、手作りと違うのは、それがグラフィックだと知った瞬間、見る側が懸命にアラを探してしまうことです。

遠景なのにはっきり見えているとか、口元の皮膚の感じが不自然だとか、背骨が鉄骨みたいだとか。

なのに、特撮の針金や背中ファスナーは見逃すし、見つけたとしても黙っています。それも特撮の味わいの一つだからお約束だから。

でもグラフィックではそういうところは見逃さない。そしてそんなこんなで、結局アラ探して終わってしまう。

本当のケレン味には、荒さが必要です。それが現実の物ではない、けれど現実の物から作り出されているのだ、という感覚を残しておけるだけの荒さが。虚構の世界に引きずり込まれそうで、けれども留まろうとする、作用反作用が生じる感覚が。

それこそが生きているのだという実感で、ですから、荒い特撮の混じっているドラマには妙にリアリティーがあります。主人公がちょっと力持ちだったり、ちょっと足が速かったり、けれど決して万能ではない。

ダーク・エンジェルという海外ドラマ、その意味で成功しています。

いかがでしたか。和風サイトを作っている割に、日本のドラマはほとんど見ません。

「三。」

三は人気のある数字です。地名や屋号になることが多く、そのまま会社の名前にもなったりします。

三文字は酒屋さん、三井は今にも通じる財閥。ふっと本棚を見上げただけで、あります三省堂。三田は地名ですが関西にも関東にもあり、関西では「さんだ」関東では「みた」と読みます。

神戸で三宮と言えは繁華街。でも、宮と言うだけあって、ちゃんと三宮神社という、小さいけれど綺麗で可愛らしい神社があります。

世田谷の三軒茶屋周辺は、関西人の私からすると「東京風情」漂うところだと思います。

砂利がきっちりと敷き詰められた細い路地を真っ直ぐ歩いていくと、路面電車の駅があります。エレベーターも階段も、改札すらも通ることなく駅のベンチに座れて、民家の塀を越えてきた陽気なオレンジ色のノウゼンカズラの、くるりと渦を巻く先っちょが風に揺れているのを眺めることができます。

踏切の近くには小さな、明るい感じの万屋さん。特に用もないのに立ち寄って、そんなに好きでもないのにラムネを買ったりします。

「謎。」

夏と言えは東京に出かけていた時期があります。

大学には、大きく分けて三種類あります。普通に昼間に通うのと、夜間に通うの、そして通信制。

三十歳を目前にして通信制の大学に入学したのは、もう十年も前のことになります。新幹線に乗ってしまえば三時間ほどの距離ではありますが、そこはやっぱり、東国。あれこれ文化の違いがありました。

食べ物云々は好みが違うので当然なのですが、いちばん不思議に思ったのは、家々の軒先に置かれた金魚鉢でした。

いや、金魚鉢というより、金魚瓶でしょうか。梅干しなどが入っている茶色い瓶、あれです。そういう口の広い瓶に、睡蓮の丸い葉っぱが浮かんで、小降りの金魚が数匹。空気のポンプがあるのとないのがあります。

不思議だったのは、どれもいつも口ぎりぎりまで水が溜まっていて、あふれると

ということがありません。毎日手入れして水の量を調節しているのでしょうか、それとも外から見えないだけで、ぎりぎりに水が来るようになっているのでしょうか。

本当に不思議で、毎朝覗き込んで、首を傾げていたものです。

「水。」

東京は、川が少ないのだそうです。そういえば、ちょうど江戸市中の両脇を、大きな川が流れています。京都は真ん中を川が通り、大阪は水路が張り巡らされ、名古屋は巨大な河が田畑を肥やす。考えてみれば、東京、つまり江戸だけが自然の大きな河から外れたところで発展しました。

それは、私が育った播磨地方にも言えます。加古川という大きな河があるのはあるのですが、その他にはほとんど目立った河がなく、しかも非常に気候が安定していて雨が少なく、稲作のための池が千年の昔から造られ続けてきました。

ですから地図を見ると、大小の池が数え切れないほどに載っています。

しかし、江戸は消費都市でした。農耕都市ではありません。武士や職人の数多住まう、しかも男女の比率が七対一という、当時世界一の消費都市でありました。

そんな江戸の真ん中に、農業用のため池など作れるわけもなく、けれどもそこは人間です、水は恋しい。

江戸城のお堀より、神田川の流れよりささやかでけれど身近な、心和む金魚の瓶に、私は江戸の、そして東京の粋を見るのです。

いかがでしたか。いやあ、夏風邪引いてしまいました。みなさんも気を付けてくださいね。

「四。」

四と言えば、もうこれしかないでしょう、四谷です。

四谷あたりの風景が、とても好きでした。中央線がぐーっと曲がるあたり、土手の緑が香ばしい。

関東の緑は深い、と友人が言っていたましたが、確かにそうです。関西、特に神

戸の木々の緑はとても軽やかで、若々しい。それに比べると東京の緑は分厚く濃い。かつて世田谷のあたりに広がっていたという森の姿を想像してみたくなります。

ですから、七年前、四谷の緑は一月の末の真冬というのに濃く、住宅街を縫う路地は落葉樹の隙間から差し込む太陽にちょうどいい頃加減に暖められておりました。

何故だか神社仏閣ばかり探し歩いていたあの頃。小さな、けれど手入れの行き届いた、可愛らしくさえある四谷の神社の境内には、別れたい人の名前が書かれたノートが置かれていて、友人は怖がりましたが、私はざっと目を通しました。

ああ、この人はこの人と別れたいのか。この人もこの人と別れたい。

顔も知らない、知ることもないことのない人たちの、切りたくても切れない縁がそこにはあふれかえっていて、縁もゆかりもない私とその名前を見ることが功德になるのだ、と思いながらも、ちょっと、くらっ、ときました。

「裏。」

ですから、さすがに神社の裏手に回るのは憚られました。

神社の裏というのは大抵たつぷりと湿っていて、複雑に絡まり合う藪苺や、人差し指ほどのナメクジ、運が良ければ、大きな緑の葉の下に赤い実を鈴のように光らせたヤブコウジを見つけることが出来ます。

この神社の裏手にはどんなに大きなナメクジが。と後ろ髪引かれながらも、やっぱり勇気がなかった。

四谷怪談のモデルになった女性は、実はとても賢い良くできた女性で、貧しかった家をコツコツと働いて復興し、庭の片隅に祭った神様をととても大事にした、怪談よりも美談にふさわしい女性だったのだそうです。

それが、いろんな話に尾ひれや胸びれ、派手な羽根まで付いて、赤穂の田舎侍の話までくっついて、もう引っ込みが付かなくなってしまったのでした。

それを知っていても、田宮の家が続いているのは祟りなどないからだということを知っていても、やっぱり、怖かった。

本当に怖いのは、あることないこと、いや、あったことをいろいろ練り上げてもとあった物とは全く違う物にしてしまう、劇作家の方なのですが。

「正体。」

戸板が返ると死体が出てきたり、破れた提灯が本当に破れると中から血まみれの顔が出てきたり、というのを、ケレン味がある、と言います。

外連、と書いて、あんまりいい意味には使われなかったようです。無駄に人を脅かしてみたり、大げさな表情を作ってみたり。

観客はもとより登場人物の正体を知っていて、それが露わになるのを喜んでくれるわけですから、やらせ、とはちょっと違います。

でも、大げさに演出することで、かえってその正体が分かりにくくなってしまうこともあります。大きな音や派手な色、点滅する光に、何かよく分からないけれど、怖かったらしい。

閉園を余儀なくされる遊園地を後目に、派手さで売っていたテーマパークの裏で、水道管があっちこっちうろうろしていた、ことの方が、爆薬や水しぶきや歓声よりずっと恐ろしく身にしみる、2002年の夏です。

いかがでしたか。いやあ、二週間もさぼってしまいました。何をしていたというわけではないのですが、やっぱり毎週出さないと、ペースが乱れますね。反省。

「五。」

五といえば、野口五郎。あ、歳がばれてしまいます。

五反田は、そこに五反の田圃があったから。世田谷や田町、三田と、東京には意外に「田」の付いた地名が多くあります。

関西に来ると、それは難読地名となります。四条畷。しじょうなわて、と読みます。「田」は付いていますが複雑化してますね。

その近辺には、関西地方では有名な放出。「はなてん」と読みます。

吹田はふきたのはずなのに「すいた」だし、十三はじゅうさんではなくて「じゅうそう」と読みます。喜連瓜破、に至ると、もう掟破りの訓読みで、「きれうりわり」となります。

滝と温泉と猿で有名な箕面は「みのお」。大阪の隣の兵庫県川西市には雲雀

丘花屋敷、なんてのもありますね。ひばりがおかはなやしき、これはビバリーヒルズをもじったらしい。

宝塚には売布神社、「めふじんじゃ」。お米が不作の時に備えて機を織って布を作りなさい、と教えてくれた女神様が奉られています。その隣には清荒神、「きよしこうじん」、竈の神様です。中山寺という安産の神様もいて、宝塚は歌劇団も含めると女性関連が多い。

だから、鴻池や住道なども「こうのいけ」「すみのどう」と、さっと読めてしまったりします。

けれど、新しい街区にはそういう楽しい読み方が少ない。神戸市の中央区は、昔は生田と葺合に分かれていました。「いくた」「ふきあい」と読みます。中央区、なんて、どこにでもある区名。つまんない。

しかも、垂水区の人口が増えて二つに分かれたのですが、それがまた芸のない、西区。もうちょっと色気のある名前はなかったんですかね。

「田。」

「田」と言う文字には、正確に区切られた土地、の意味があります。田という文字が付けば、昔そこは田園地帯、稲作をして暮らす人々がいた、ということになります。ですから、近畿の「畿」という文字には田が入っているのです。

けれど、近畿という言葉は使われなくなりつつあるそうです。

畿はちょっと郊外、という意味ですから、近畿と言えば、都に近いちょっとした郊外。しかし、京都は既に都でなくなって久しい。ですから、狭い意味での関西、という言葉を使うらしい。

都を厳密に本来の意味で使うなら、今関東と呼ばれているあたりを近畿と呼ぶなければならないでしょう。けれど今更それはできないし、第一なじみがない。

だからとりあえず大雑場に分けて、東京周辺を関東、大阪周辺を関西、ということにするのでしょうが、そうすると東京の人から見ると九州や四国まで「関西」になってしまうし、関西から見れば北海道まで「関東」になってしまう。

「ややこしいけれど。」

東京が都になったときに、いや、大体東京というのが矛盾を含んでいるわけで、その時に東京近郊を近畿にしていれば良かったのですが。

逆に見ると、そういう地名の矛盾から日本の歴史を眺める方が、面白味はあるかも知れません。何故そこがそう呼ばれるのか、そこには必ず意味がある、つまりは歴史がある。

芭蕉が奥の細道に分け入ったのは、東北地方が十八世紀まで広く奥羽と呼ばれていたからで、四国が四国なのは昔から讃岐、伊予、土佐、阿波の四つだったから。

武蔵の国も、山城の国も、浪花の国も。今はただの都や府になってしまっていて、つまんない。

美しい日本語を守るなら、まずは、新しい地名を付けるときには、なんとか「台」とかなんとか「ヶ岡」ってのは禁止、ってしてしまうのは、いかがでしょう。

いかがでしたか。子供の頃住んでいたのは平岡だったな。つまんない。

「六。」

六といえば、すごろく。双六、と書きます。

二つの賽子を転がして、出た目の分だけ行ったり来たり。インド発祥のこの遊びは、西洋ではバックギャモンになり、日本では江戸の初期の頃から民間に広まり、中期頃からは著名な画家も双六を制作したりするようになりました。

定番としては、道中双六。出発点が江戸日本橋、終点は京都の三条大橋。

他にも物尽くし双六といって、季節の風物詩が順番に描かれたもの、動物が描かれた子供向けの物、それからたぶん、枕元で遊ぶちょっと色っぽい双六もあったことでしょう。

一昔前、ファミリーゲームと言えば人生ゲームのような双六のことをいいました。

友達の家銀行強盗ゲームというのがあって、小さなトラックに宝石が一杯詰まったことになっているトランクをはめ込んで、強盗、つまり透き通ったトラックとかち合わないようにして、自分の銀行に全部トランクを運んだら勝ち、というのがありました。

その友達の家には他にもゲームのセットがたくさんあって、ピンを刺して絵柄を作っていき、出来あがったら後ろからライトを照らす、とか、大きな歯車の穴の中に鉛筆を突っ込んでグルグルやったら模様が出来るとか、一通り全部遊ばせて貰いました。

「ルール。」

多分友達は、一緒に人形遊びをしたかったのかもしれませんが、私が人形には全く興味がないのをよく知っていましたから、人形遊びを無理強いはしませんでした。

その代わり私も、彼女が虫や魚などの生き物を嫌いで、綺麗好きなのを知っていましたから、裏の雑木林を探検するときや基地を掘るときや用水路で泥鰌を驚掴みするときには、無理には誘いませんでした。

ですから、彼女と遊ぶときには、あやとりや折り紙、または室内ゲームで、すこぶる行儀良く遊んでいました。

そうやって行儀良くできる自分、というのも、別の自分のようでそれはそれで面白かった。室内の遊びには野外の探検よりも細かいルールが多くて、でも友達はそのルールを破るようなことは決してなく、ですから私も絶対に抜け駆けは出来ない、そんな緊張感を楽しんでいました。

「外でも。」

しかし、外の遊びにもルールがあります。

といっても、そんなに難しいルールではない。賽子が転がるわけでも、時間切れになったらバネが飛び出すわけでもない。

ただ、ゴミを捨てないとか火の始末をすとか、どうということのないルールがあるだけのことです。それは、守るというレベルのルールですらない。

でも、ルールを破ることが楽しくて、それこそが遊びだと思いこんでしまった、それが遊ぶ者に許された自由なのだと思いこんでしまった人々は、はるか外国の山にバンバンゴミ捨てて、自然を愛する少年の心を持ち続けるのだそうです。

いかがでしたか。双六作るのが好きだったなあ。永遠に上がれないやつとか、

作ったっけ。

「七。」

七といえば、七五三。子供のお祝い。

日本には子供のお祝いがとても多くて、七五三の前にもお宮参りやらお食い初めやら、雛祭りやら端午の節句やら、なんだかんだでずっとイベントです。

そんな大忙しの子供に関する言葉に、「七つまでは神のうち」というのがあります。

子供は神様のように大事にしなければならないの、とか子供は天使のように純粋なのよ、という意味ではありません。まだ子供は人間になりきっていないので、すぐに神様に戻ってしまう、つまり成仏してしまう、という意味です。

日本は現在、子供が死なない国です。五歳までに死んでしまう子供の数は、千に対して五。世界でも最も低い水準です。

しかし江戸時代ではそうもいかなかったでしょう。流行病もあれば天災もある。おそらく、その時代の他の国の大都市と比較すれば、死亡率は低かったでしょうが、さすがに現代ほどではなかったでしょう。

ですから、長澤蘆雪(ろせつ)のように、子供が四人いても全員小さいうちに亡くなってしまうたり、上田秋成のように、いずれ養子にしたいと思うほど可愛がっていた幼児が死んでしまって、絶望のあまり医者も辞めてしまった、ということも、そんなに珍しいことではなかったでしょう。

「それでも。」

しかし、珍しくなかったからといって納得できるものではありません。

それに、子供が丈夫に育つ場合もあります。内藤丈草(じょうそう)には八人の異腹の兄弟がいました。いったん育ってしまうと、長生きです。

葛飾北斎が九十を生きたのは有名ですし、伊藤若冲も八十を過ぎてもぴんぴんしていました。

どうして自分の子供だけ、死んでしまったのだろう。

上島鬼貫(おにつら)は、まさに食べたいくらい可愛がっていた息子を亡くした次

の歳、「この秋は 膝に子のない 月見かな」と詠みました。

蘆雪の画には、背中を見せて駆け去っていく子供の姿が、鏡を合わせた無限回廊のように連なっています。

子供も、死にたくて死んだわけではないだろう。小さな体で病と戦ってさぞかし辛かったことだろう。

けれど、やはり恨み事が口をついて出てしまう。

どうして生きていてくれなかったのか。

その悲しみは、母親より父親の方が深いように思います。女性は子供の心臓の音を体の中で聞き続け、同時期に生きながらも、どこかに子供が早世するだろうという予感を抱えています。

けれど、子供が生まれ落ちてきて初めて父親になった男は、納得できない。どうして自分から子供を奪っていくのだ。

どうしてだ。

「意志。」

けれど、やはりほとんどの場合、子供は自分で死を選ぶことはありません。七つまで神のうちというのは、その意味もあるかも知れない。自分が生きているという実感がまだ持てないから、死ぬ意志もない。

その逆は、必ずしも真ではありません。生きているという実感があるから死ぬ意志がある。違いますね。

まだ神のうち、親がいなければ生活できない子供を残して、自分の意志を貫く人々が、三年連続で一万人を超えたといいます。

彼が残すのは保険金。それで家族は生きていけます。葬儀の席で、「お父さんは立派な人でしたと子供達にも言い聞かせます」と、子供を抱きしめながら泣き崩れる女性。

彼女は、本当にそう思っているのでしょうか。

子供の成長を見届けることなく、子供を捨てて逝ってしまった、しかも自らの意志でそうした人を、父として夫として立派だと思い、あなたもそういうお父さんになりなさいね、家族を守りなさいねと、子供に言い聞かせるのでしょうか。

誰が、お父さんを、そこまで追いつめたのでしょうか。

それとも、そうやって追いつめていくのが、誰かを犠牲にしてでも存続させて行くのが、家族のあるべき姿なのでしょうか。

いかがでしたか。「お父さん」に対して世の中は酷すぎる。

「八。」

八はめでたい数字。末広がりとは八の姿をもって末永く栄えることを意味する言葉ですし、八百八町、八百八橋といえば都会の代名詞。八十八夜を過ぎれば気候も安定し、霜の心配もなくなります。八十八カ所お参りすれば御利益もあります。

八の字は垂れ下がった眉毛にも似て、なんとなくのんびりした感じがある。当たるも八卦、当たらぬも八卦。八朔は夏蜜柑の友達、分厚い皮に爪を立てると、ぴゅっと果汁が飛んできます。

近江八景金沢八景。観光シーズンになると、必ず眼にする漢数字と言えば八、なのでは。

その他、格好のいいこと、少々軽薄なことにも使われます。八頭身美人、口八丁手八丁。

八は、はちが、はっ、と促音便化するので、威勢のいい感じがするのでしょう。あれこれと慣用句の多い数字です。

「すべてではない。」

ただし、全ていい意味ばかりではありません。

八方、という言葉が辞書で引いてみましょう。八方美人。決して誉め言葉ではありません。八方破れ。どうしようもありません。八方塞がり。これもまたどうしようもない。

八方とは、東西南北、全ての方角をいいます。東南東や北北西なども入れれば十二方なのですが、四方八方手を尽くす、と言えば、全て含みます。

七と組み合わせると、さらにやりきれないものになります。七転八倒、七転び八起き。字は似ていますが、かなり意味は違います。七転八倒はもたえ苦しむこと、

七転び八起きは転んでも転んでも起きあがること。七回もこけるんですか。痛い
です。

どうも、八というのは限りなく続く、という意味合いを含むらしい。

徳川家康が江戸城に入ったのは八朔の日であるというのは有名な話。

彼は白装束、つまり死に装束に身を固め、半分水没している城の真ん中に立
ち、天下の統一を心に誓ったのだといいます。

永遠ではありませんでしたが、徳川幕府という紛れもない軍事政権であるにも
関わらず、三百年近くの平和は、江戸を世界一の都市にしました。

家康が望んだのは、平和だったでしょうか。四百年の昔の人々の、しかも闘い
を生業とする武士が思う平和を、私は想像し難い。

ただ、幸運にというべきか偶然にもというべきか、その三百年の間、近隣諸国も
比較的平和でした。大国中国は当時明と呼ばれ、貿易も盛んになされました。朝
鮮半島では臣民の暮らしを向上させるための文字が作られていました。

江戸時代の平和を、奇跡だという人もいます。それはある意味では当たってい
るかも知れません。せつかく江戸城は無血開城されたというのに、明治以降の五
十年間、この国で戦火の止むことはありませんでした。

「これから。」

そして五十年。ソビエトは崩壊し、冷戦は終結しました。中国は経済発展を続
け、韓国はIMF危機を乗り越えました。日本はバブル崩壊後、大銀行や大企業が
その生っ白い馬脚を現し、自滅していています。

ただひとつ、五十年前と姿を変えていない国。

その国の扉がわずかに開かれたと、多くの人はいいます。その向こうに見えた
ものを、信じる事が出来ないと言う人もいます。信じるべきではないと言う人もい
ます。

横田めぐみさんは、私と同年です。私の母も、彼女のおかあさんと同年で
す。

ですから、私が過ごした十代、二十代、そして三十代も、彼女にとって当然あ
るべきものでした。

けれど、私は、彼女がそれを取り戻すために、何か努力をしてきたのでしょうか。

何事かを訴えてきたでしょうか。関心を持ってきたでしょうか。

いいえ。ただ安穩と日々を過ごし、遠いところで昔々に起こったよく分からない奇妙な事件、として済ませてきました。

外務省が腰砕けであったのなら、私もそうでした。私には、関心があったとは、とても言えない。私と同じ年の女性が奪われた人生に対して関心があったというふりは、とてもできない。

悲しいふりをする資格すらも、ありません。

これからは決してあんな事は起こらない、起こさない。その言葉を信じられないのと同じくらい、私はこれからの五十年が、これまでと同じ五十年であるということが、信じられない。

これからは、平和は偶然や幸運には助けられません。それこそ七転八倒の苦しみの中でなければ得られないものになりました。

そして、もしかしたら、八回立ち上がってもなお、再び打ちひしがれるかも知れない。

それに耐える力を、私は今、自分の中に信じる事が出来ないでいます。

いかがでしたか。9月は、辛い。

「九。」

九と言えば九九です。小学校の二年生頃にやらされた記憶があります。

やらされた、というからには、嫌だったんですね。はい。何しろ覚えると言うことが大嫌いでした。覚えろと言われると、意地になって覚えなかった。

なんでそんなにまでして抵抗したんでしょうかね。いまだに覚えるのは苦手ですが、それは多分老化のせいもあるのでしょう。

記憶力がまだ若いはずの子供の頃も、とにかく覚えたくなかったのも、九九の表はずっと水色でした。

九九を全部間違えずに言えたら金のシール、少し間違えたら(特に7の段)銀のシール、次が赤や黄色で、全然駄目なら水色のシールという、今なら親から文句が来そうな表が、教室の後ろに貼られていました。

しかし、それを見ながら私は一人ほくそ笑んでいたのです。

九九を覚えなくても、かけ算は出来る。

足し算の組み合わせで、しかもほとんどひと桁の足し算で、かけ算は出来るんだ。

ふふふ。

「半分にしてみる。」

といっても、ちょっとは覚える必要があります。2は偶数、3は奇数ということと、6は5に1足したもの、7は5に2に足したもの、8は5に3足したもの、ということ。でもこれは覚える、というより、数の性格を理解する、と言った方が早いでしょう。

そして、9は10から1引いたもの。

2の段は、数字を飛ばしていけばいい。4の段はそれを倍、8の段はそれをまた倍。並べて書くならこれで出来ます。

5の段は、倍して半分にすればいい。一の位は必ず0か5ですから、計算も簡単です。

3の段は、足せばいい。四回足すくらいは暗算で出来ます。3掛ける6なら、3掛ける5に3を一つ、3掛ける7なら、3掛ける5に3を二つ足せばいい。

ただ、8の段を単独で訊かれた場合、ちょっと時間が掛かります。

その時は、5と3の組み合わせ。または、ひっくり返す。

かけ算は、前後の数をひっくり返しても結果は同じです。ひっくり返して、小さい数でやればいい。

9の段などは、10倍して一つ引けばいいのですから、らくちんです。

そこで問題になるのが7の段。7掛ける6、7掛ける7。ひっくり返しても、やっかいです。

7掛ける6なら、70の半分の35と7を足せばなんとか出来ます。

けれど、7掛ける7は、ひっくり返しても7掛ける7。

と、思いつきました。

一の位が9になるのは、3掛ける3と7掛ける7だけ。19も29も39も59も69も79も89も九九には出てこない。49、ただ一つ。

これは、ただ暗記したのではない、発見なのだと、ひとり悦に入っていたのでした。

「便利とは。」

テレビでちらりと見ただけですが、「声に出して読む日本語」の著者が、「国語の九九を作っていきたい」と述べていました。

ということは、私は覚えられませんね。

たぶん、日本語特有の音の響きを、読んで声に出すことで体に染みこませたい、ということなのでしょうが。

やっぱり、覚えたくはない。

人の言葉を聞き取って、そのまま口にするのも、きっと「覚える」ということなのでしょう。丸ごと素直に、覚える。

私は、それが出来ない。一度私の中に入った言葉は一瞬にして全部分解されて、意味だけ伴って、私の言葉使い、言い回し、ひねりを伴って出てきます。

強力な言葉の消化酵素のおかげで、私は他人の言葉に感染しないのですが、通訳にはたぶん一生、なれないでしょう。

いかがでしたか。いや、通訳になりたいわけではありません。

「十。」

十と言えば、松波勘十郎です。国会で水かけた人じゃありません。

あの水戸藩の一揆を誘発されたとされる、御渡侍の一人です。

御渡侍。おわたりざむらい。なんだかとっても、悪い響きですね。

そうです。特定の藩に務めるのではなく、あちらこちらの藩に出入りして経済を立て直す、江戸時代の経営コンサルタントのようなものです。

コンサルタントと言っても、実際のところは借金のカタのようなものでした。松波勘十郎の場合、將軍の遠い遠い親戚に当たるのだそうで、つまりは厄介者のお坊ちゃんを雇って貰う代わりにお金出します、なのでした。

裏口入学とか、父親の会社の役員になる道楽息子を想像しましょう。

それでも、大学では一生懸命勉強したり、最終的には独立して立派に会社をもち立てたり、するならばよいでしょう。

けれど松波勘十郎は、全くその逆を行いました。

完成するはずのない工事を無理矢理完成させたふりをして、農民を重労働にこき使う、しかも工事代金を踏み倒す、お城を守っている松並木を切り倒そうとする、藩札を発行しまくる。

「反発。」

当然、農民だけでなく、他の藩士からも猛烈な反感を買います。

そして、水戸藩から江戸に上って直訴するという、大規模な一揆が実行に移されました。

といっても、そこはやはり封建時代。農民が大勢で直訴することはもちろん、直接江戸城に向かうことなどはもってのほか、極刑に処されても文句は言えませんでした。

それでも農民達が立ち上がったのは、自分たちの生活を守ることもちろんでしたが、水戸藩という、誇り高き御三家のひとつを主に持つというプライドを守るためでもあったでしょう。

ですから、松波勘十郎は、父親共々捕らえられて獄死しますが、一揆を起こした農民側が多数処刑された記録というのは残っていないのだそうです。

江戸に、ほど近い水戸。一揆が起こりそうだという情報は、とくに江戸に伝わっていたでしょう。

それなのに農民達が処罰されなかったのは、水戸藩の藩士達の、やりどころない思いを一揆が代弁してくれていたからかも知れません。

「代弁は。」

特にインターネットが普及しだしてからは、誰もが自分の意見を直接言えるようになった、ような部分もあります。新聞や雑誌への投書なら採用されても編集されますし、時間差も生じます。

けれど、リアルタイムに交わされる言葉に、何かを代弁するほどの重みはありません。何でもない日常と個人の事情、狭い年齢層での情報の読み直しと、妙なへつらいと媚笑い。(笑)

私たちが上るべき都は、どこにあるのでしょうか。

いかがでしたか。

有料のマガジンを月に4本発行しようとする、どうしてもこのマガジンを発行する頻度が低くなってしまいます。

廃刊しようかしら、とも思ったのですが、初めて作ったメルマガですし、なんだかんだで三年近く続いているわけで、愛着もあります。

というわけで、週刊発行を、隔週刊発行にします。といっても、内容が変わるわけではありませんし、もしかしたら月に三回出るかも。

ということで、今後ともよろしくおつきあい願います。

「十一。」

十一といえば、侍です。士は縦に分ければ十一になります。

短い月を覚えるのに、西向く侍、と覚えた人、いらっしゃいますか。

二と四と六と九と十一。長い月の方はいっさんごひちはとじゅうに、そのままなので、西向く侍の方が印象に残ります。

侍は、寺の人。もともとはお寺を警護する人の意味ですね。兵は僧兵なんかが有名ですね。侍は、戦う人々とはちょっと違う。ぶらぶらする、さまよう、さぶらう、を語源とするのだそうです。

なんか、暇そうですねえ。まあ、お寺に何事もない方がいいに越したことはないのですが。

下手すると、一日中西向いてただけで終わった侍も、いることでしょう。

「士。」

侍資格、という言葉があります。士資格ともいうでしょう。

弁護士、税理士、行政書士。国家試験の中でも、ちょっと勉強しないとダメだね、資格のことです。

私は自慢ではないですが、資格を持っていません。運転免許も持ってません。教職の免許も持ってません。とりあえず大卒ですが、そういうのは資格とはいわな

いでしょう。漢字検定も、準二級では資格とは言えないそうです。英検は受けたことないです。

ですから、当然侍資格も持ってません。

そして、文章には侍資格がないので、こんな半端な私でも文章を書く資格を奪われることはありません。

それは逆に、侍資格で世の中を渡っていくことが出来ないということも、意味します。

この頃は文章の検定もあるそうで、国語の試験のようなもので、だからきっと私は落っこちるのだろうなと思いつつ、韓国語の勉強はしています。

「刀。」

侍資格は、いわば名字帯刀を許されたようなことをいうのでしょうか。

侍は、この場合、士は、人の命に関わることに首を突っ込んでも構いません。それによって収入を得ることが許される。法的な手段に訴えることも許されるし、逆に法律でその人の息の根を止めることも出来る。

法は、諸刃の刃です。解釈によって、人に自由を与えることも、奪うことも出来る。戦争中でもないのに国家が人の命を奪えるのは、法律があるからです。

そして実は、侍ではない人にも、その資格はあります。

それは公務員。自分で稼いだお金ではない、国民が納付したお金を使うことが出来る。それで収入を得ることも許される。

そして、条例という特別法に則って、市民や県民の財産を差し押さえることも出来る。挙動不審な人物の自由を奪うことも出来る。

煙草をポイ捨てした人を追っかけて、お金を徴収することも出来ます。

それは、本来の侍の姿です。自治体という、小さなお寺を美しく保つために、美観を損なわないために、侍は市民の自由を奪うことが出来る。通行を妨げることが出来る。住所や電話番号を聞き出すことが出来る。

さらに、そのポイ捨てされる、美観を損ねる、吸っている人のみならず、周囲の人々の健康も損なう煙草でもって、税金を得ることも許されています。

それは、小さな刀です。けれど、確実に市民の自由を奪うもの。銃のように遠くに弾が飛んでいく物ではありませんが、確実に人を傷つける物。

あなたは、その刀を、どうしますか。

いかがでしたか。煙草を吸わないのでポイ捨てるのしようありません。

「十二。」

もうすぐ十二月ですね。けれど十二月なのは太陽暦だから。

江戸時代には一年は十二ヶ月とひと月でした。閏の月があるからですね。太陰暦では一年を354日と定めているので、余りが出るのだそうです。太陽暦では閏日は四年に一度。2月29日です。

私が生まれた年は閏年で、誕生日が2月29日の友達がいました。四年に一回しか年をとらないねえ、などと言っていましたが、やっぱり彼女も同じように年をとっているはずです。

あまりのない十二は、干支です。来年は未年。

羊は紙を食べるので、お金を食えると言って嫌がる人もいるようですが、それならネズミは病原体を運ぶし、牛は寝てばかりいるし、虎は怖いし、ウサギは体が弱いし、辰は空想上の動物だし、ヘビも怖いし、馬は走り出したらどこまで行くか分からないし、羊はめえめえだし、猿はひっかくし、鶏は飛んでいってしまうし、犬は主人の言うことをほいほい聞くし、イノシシはぶつかってくるし。

「逆に。」

逆に、いいように解釈してみます。

ネズミは「コマネズミのように働く」という言葉に象徴されるよう、こまめに働いて、よく気が利く。

牛はおっとりして落ち着いていて、優雅である。

虎は自尊心が強く気品があり、行動力がある。

ウサギは観察力が鋭くて面倒見がよく、努力家で頭がいい。

辰は神の化身と言うだけあって、天才肌である。

ヘビは金運が強くしかも堅実で、人に信頼される。

馬は活気に溢れリーダーシップがある。

羊は常識的で真面目、常に公正さを求める。

猿は社交的で明るく、人を笑わせるのが上手い。

鶏は華やかで人目を引くが、それをひけらかさず、優しい。

犬は人なつこく礼儀正しいので、誰にでも好かれる。

イノシシは困難に強く、逆境に立ち向かう底力がある。

なんか、占いコーナーみたいになってきましたが、これは、私の周りの人々の長所を干支になぞらえながら列挙したものです。

そんなことない、牛は鈍くさいとか、ウサギは意地悪だとか、犬は八方美人だとか、辰は変人だとか、いろいろな意見もあることでしょう。

けれど、それをとりあえず長所として捕らえて、干支に当てはめてみると、なんだか短所も愛嬌のあるものに見えてくるのは、私が辰年で強引だから、でしょうか。

「あれこれ。」

大流行した動物占いでは、私は羊でした。黒豹が良かったのに、うまいこといかないものです。

面白いもので、自分のは気に入らないのに、人が狼で孤独を愛していたり、猿で見栄っ張りだったり、コアラで下手に出がちだったりすると、当たっている当たっていると言っていると喜んでしまいます。

但し、この占いには年齢制限があるのだそうです。1950年ごろより前に生まれた人には、当てはめるべき数字がないのだそうです。

ある程度の年齢以上になると、ほとんどの人が、会社員と主婦、そのどちらかに、綺麗に分かれてしまいます。それは、ある意味で誠実さとも言えるのですが、その人々は、男はこうだ女はこうあるべきだと言い合っては、あげくに自分の子供達から総すかんを食らっているように、見えます。

そんな風に思うのは、私が嫌味な辰だからでしょうか。

いかがでしたか。辰年は好きです。でもドラゴンズファンではありません。

「十三。」

もうすぐ十二月ですね、と呑気に言っていたら、明日は冬至です。

十三は、ご存じのように西洋ではとっても不吉な数字です。

けれども、日本では縁起のいい数字の一つに入るらしく、よく使われます。有名なところでは、栗より旨い十三里。栗は九里、よりは四里。九は苦に、四は死に繋がるとして疎まれるのですが、それを足してしまうと、ほこほこと美味しい石焼き芋になる。

近世には土用の鰻など、現在でも生きている名作コピーが多数ありますが、十三里はその中でも秀作の一つ。

辞書を眺めていて、もう一つを見つけました。九里と四里でくし、だから櫛屋さんのことを十三里屋ともいうのだとか。

しかしさすがに現代では櫛専門店を連想しろと言うのは難しい。くしと言えば串、串カツ屋さんの方になってしまうかな。

「渡し。」

関西では、十三と言えばじゅうそう。阪急の大きな駅のある、北野高校のあるところ。

といっても、私は大阪生まれではないので、北野高校がとっても賢いということ、つい三年ほど前に知りました。十三駅で降りたのも一回だけ、昼間に映画を見に行っただけ。いつもとっとと乗り換えて吹田や京都に行くだけ。

ですから、十三の由来も、社会の時間に習ったりはしませんでした。淀川の渡しの十三番目があつたので十三になったとか。梅田が埋田より、風情があります。

でもさすがに昔から渡しのあつた場所だけあって、活気は物凄い。駅から降りなくても、駅の中でだけでもその活気を体全体に浴びることになります。大きな暖簾の蕎麦屋さん、大阪名物を景気よく売る売り子さん、中学生から大学生まで、半分くらいは学生さんで、ホームはいつもごった返しています。

「駅。」

駅はその名前の通り、馬の中継地点のようなところでした。大きな駅のあるところは、城下町と同じように物が行き交い、必然的に賑わいました。

十三の駅は、駅の中で簡単な買い物を済ませることが出来るほど、便利です。ホームは外にあるので雪が舞ったりもしますが、活気でほんのりと暖かい。

ひとごみは嫌いですが、駅の、それぞれの目的のある人々があるいは忙しく、あるいはのんびりと、あるいは人待ち顔で行き交うところは好きです。

ですから、駅の風情というものには捨てがたいものがあると思っています。

播州の駅の雄、加古川駅が、高架の工事で解体されるかも知れないという噂を聞きました。

播州の中でも最も古い駅の一つ。コーヒースタンドや広い待合室、蒸気をあげる加古川線の車両。白い唐屋根は重みの中にも軽やかさがあって。

けれど、播州の人は気前がいいというか何というか、自分たちの持っているものに対する執着が、ほとんどありません。ですから、壊すなら壊せばいいよ、という人も多いのだとか。

壊すのは簡単ですが、一度壊してしまったら、二度と元には戻らない。

大型店舗の撤退で景気の悪い話ばかりの加古川、ここで巻き返しというわけには、いかないでしょうか。

いかがでしたか。日本一綺麗な駅は阪急の夙川(しゅくがわ)駅。
だと思います。

「十四。」

去年は平成十四年でした。今年はもちろん十五年。

江戸時代の年号は十五年も続いたらいい方でした。大きな飢饉や火事などの災害があると、年号が変わってしまったからです。

ですから、元禄というのはいいい時代だったのでしょう。

戦国時代が終わり、世の中が安定し始めてから五十年ほど。戦争を知らない世代が、ぼちぼちと育ち始めます。

昭和元禄という言葉があったほど、元禄時代は平和な時代でした。

それなら、昭和はそれほどにいい時代だったのか。

もちろん、昭和の十年代は、もっとも暗い時代です。そして戦後の二十年代などは、歴史の空白時代だと言ってもいい。占領下の日本人には自治権はなく、戦時中よりもむしろ生活は苦しくなりました。

そんな事実を、けれども教科書はあまり教えてくれません。その時代に生きた人々の口も重い。

昭和十四年から三十年頃までの歴史の中に、実は日本の真実が隠されているのだと思うのは、私だけではないと思います。

「平安。」

江戸時代の絵画をよく見ると、平安、と書かれていることが、よくあります。

あまり意識されないことですが、東洋の絵画には題名は付きません。代わりに、作者の名前や判子のはっきりと左下に記されます。それらを、落款と言います。

落款の中には制作日時が記されることもあって、その時に用いられるのが平安、という言葉です。

二十世紀を生きる私たちにとって平安と言えはあの平安時代で、十二単を着た貴族の女性が優雅に歌を詠んでいたりなんかするのですが、江戸時代の人々にとっては、今あるその時代こそが平安でした。

もっとも、ただ平安の日々を安穩と過ごしていたわけではないでしょう。飢饉もあれば物価の高騰もある。台風も来れば売り惜しみ買い惜しみもある。

当時世界一の人口を抱えていた江戸が、生き馬の目を抜くと言われたのは、全くの平安な土地ではなかったからでしょう。

それでも、四百年近くの時を経て、平安という言葉の記された絵画が燃え残ったことを、私はやはり奇跡だと思うのです。

今ある、この時こそが平安である、平安であれという、祈りすら感じられるのです。

「平壤。」

堰を切ったように、マスコミが北朝鮮の現代を報道し続けています。

けれど、彼らが愚かだと、どうして日本人の私たちが言えるのでしょうか。

つい六十年ほど前に、竹槍で戦闘機を落とそうとしていた国の国民が、何故彼らを笑えるのでしょうか。大学生が飛行機を乗っ取ってまで憧れた国を、何故笑えるのでしょうか。

真面目な中小企業は潰されて、何もしない大きな会社ばかりが借金の棒引きをして貰える、不良債権があるからと税金も払わない銀行は税金を投入されてまた新たに不良債権を出し続ける、そんな事を続けている国に住んでいて、いったいどの国を笑えるというのでしょうか。

それとも、平ら、という名前のついた街で、どれほどの人々がまた凍り付いた大地に倒れていくのか、想像するのが辛いから、虚勢を張り続ける彼らを嘲笑するのでしょうか。

いかがでしたか。滑り込みセーフの、あけましておめでとうございます。

「十五。」

十五といえば、十五夜です。

とんでもなく季節外れですが、十五夜にお団子を供えたり、薄を飾ったりしますね。その場合の十五夜は秋ですが、春の朧も、なかなか捨てたものではありません。

月蝕が好きでした。実家には手頃な東の窓がなくて、お隣との垣根の隙間からなんとかどうにか見える月を、窓枠にしがみつき、しかも垣根の枝に目を突っつかれないようにしながら、なんとかどうにか見るのが、好きでした。

欠けていく月にずっとつきあっていくくて、澄んだ光を浴びながら痺れかけた上腕で耐えていました。

そういえば、他にも気に入りの窓枠がありました。

古い家を建て増し建て増した実家の、その中でも一番古い窓枠には、たぶんスペインの民家を真似た、緑の幌がありました。

そこに、いつも徳利蜂が巣を作っていました。

「巣。」

徳利蜂の名の通り、その蜂は小指の爪ほどの大きさの、土でできた壺の中に卵を産みます。

蜂は、器用です。いや、蜂だけには限らないでしょう。機を織る鳥もいるし、茅を編む鼠もいます。

そんな巣を眺めているのが、好きでした。眺めていただけではなく、手に取っていたこともあります。たいてい巣は脆く、すぐに壊れてしまうのですが、小さな生き物が作り上げる、精巧な、しかもその生活に密着したものを眺めているのが、大好きでした。

卵を産み、子供を育て、眠り、起き、死んでいくための巣が、好きでした。

「作品。」

作品、という言葉、好きではないのです。そこからは生活の匂いがしないから。そこで生きる人の体温が感じられないから。

私が好きなのは、人々が毎日の暮らしに眺めたであろう小さな絵や、屏風の修理のために張り重ねた小粋な版画です。

本物だと分かった途端に三千万になってしまう絵では、ありません。

ですから、私にとっては、鳥や虫が針の先より細い足で、その人生のほとんどを捧げて織り上げた透き通るような巣の美しさと、八百屋の跡取りが家業を放り出して人生の半分を投じた絵画の美しさは、同じものなのです。

私が映画があまり好きではないのは、そこから指の感覚が感じられないからでしょう。好きな人にとっては、そこにこそ人間の創造が存在するのでしょうか。

私にとって人間の創造と動物や植物の営巣は、たぶん同列なのです。

いかがでしたか。

ああ、2月は発刊できませんでした。すみません。3月は、もう少し時間を上手く使えますように。

「十六。」

十六といえば、十六夜です。

いざよい、と読みます。十五夜の次の日の、年老いた月。

その月の味わいが分かるようになれば大人だけれど、あなた達にはまだ分からない、と決めつけたのは、中学時代一番嫌いだった国語の教師でした。

何かと言えど何でも決めつけて、「あなた達にはまだ早い」「あなた達にはまだ無理だ」という人でした。

もともと国語という科目は退屈で好きではなかった上に、二言目には決めつけるのが鬱陶しくて仕方なかったのも、決定的に国語が嫌いになりました。

しかし、嫌い続けるというのにも体力がいるもので、高校に入学して、やっと離れられたときには、ほっとしたものでした。

高校の国語の先生にはそこそこ面白い人もいて、古典の品詞分解を友達と競争するのも楽しくて、その先生のこともすっかり忘れていました。

「やっぱり。」

あれは、五月だったか、それとも六月だったか。

中学の同級生が、踏切で亡くなりました。

同じクラブ活動だったし、中学を卒業して間もなかったのも、お葬式に出席しました。

彼女は女子校に通っていたので、知らない制服を着た女の子がたくさんいて、あっちこっちで泣いていました。私は、どうしても無理に遮断機をくぐってまで渡ろうとしたのか、どうしても分からなくて、黙っていました。

そこには、あの国語の教師がいました。そして、こう言いました。

「あの子の分まで勉強するのよ」

知らない制服の子たちは呼応するように泣き、ああやっぱり、私がこの教師を嫌っていたのは間違いではなかった、と、つくづく思いました。

「月。」

いざよい、というとそのことを思い出すのは、月のせいではありません。

でも、亡くなった友達の代わりには、私はどうしてもなれない。

鉄腕アトムは、亡くなった息子の代わりに、天馬博士が作ったロボットです。天

馬博士は勝手な奴で、自分が作ったくせに、どうしておまえは大きくならないんだ、とアトムを責めるのです。

そんないきさつを知らない人が多いということは、アトムが本当はどうして生まれたのか、知らない人が多いということになります。

望まれなかった子供。生まれてはならなかった子供。

そんな子供として、手塚治虫はアトムを誕生させたのだという気がしてなりません。最後にアトムは、人類のために犠牲になります。

生まれてはならなかった子供は、他の人のために死ぬことでしか、自分を生かすことが出来ないのでしょうか。

イラク戦でなくなった兵士の中に、グリーンカードを手に入れるために入隊した、アメリカ人ではない若者がいたことを、手塚治虫は生きていたなら、どう感じたでしょうか。

いかがでしたか。

ああ、もう4月が終わる。

ちょっと近世・ほっと現代のコラムは、ひとまずここで終了。

2020年の正月。コラムを全て読み返して、世の中があんまり変わっていないなと思いながら、かく言う私もそれほど進歩はしてないなあと。

PHSの終了が近づいたので早めに予約したら思ったより早く交換機が届き、新しい開閉式のガラケーにまだ慣れずにいる、そんな歳の初めてです。



ちょっと近世・ほんと現代 番外編 vol.1
2020年1月5日

著者 大宮ししゅう
発行所 Paper*Back*Factory

メインサイト ちょっと近世・ほんと現代
(URLは著者セントラルに記載)

From PDF : Quartz PDF Context

© Shishow Ohmiya 2020